



今回は 芸術科(音楽)に関する授業改善の報告です！

グローバル社会に対応した社会貢献できるような人材の育成を目指す学校だからこそ、音楽科としては豊かな感性と生きる力を養ってほしい、生涯にわたり音楽が側にある豊かな人生へとつなげてほしい、と願っています。

◇ 音楽科の現状、表現領域より ～三線の音色に親しもう～

三線という楽器

三線は、中国から琉球に伝来した「三弦(サンシエン)」をルーツとした楽器です。三味線に比べて棹は短く、胴にはニシキヘビの皮が張られています。水牛の角などでできた爪で弦をはじいて音を出します。男絃(うーじる)女絃(みーじる)中絃(なかじる)棹(そー)駒(うま)胴(ちーがー)胴巻(ていーがー)など沖縄名称を読むところから開始しました。

意外と苦心したのは駒の立て方。倒れると驚くような大きな音がするので、生徒達は慎重に作業をしていました。しばらくすると、駒の位置の勘所も押さえ、うまく立てられるようになりました。カラタイを回して行うチューニングにもなかなか苦勞していましたが、早々にコツをつかみ、友人の分まで行ってくれる生徒も多くいました。

生徒の様子

当初は、構え方や奏法に苦心することに加え、「工工四」という三線独自の文化譜を読むという壁を予想しました。コンコーネ・コールユーブングンの抜粋版で正しい音高で歌うことやリズムを正しくとる練習に苦勞していた生徒もいますし、当初は、文化譜をすべて『ドレミ…』に書き直し、提示することを覚悟していました。

しかし、3年生の選択で取り上げたところ、「工工四」でも、工五六七四上中尺合乙老を操り、馴染みのない文化譜にも対応し、基礎練習をあっという間に完成させました。3年生の視野の広がりや柔軟性には驚き、大きな成長を感じたとても感動的な瞬間でした。

そのような場面に勇気ももらい、1年生も文化譜をそのまま使用することにしました。ギターのタブ譜のように三線の弦を3本書いた上に工工四を表示すればかなり親切な「三線のタブ譜」になるのですが、そのポジションのみ、片隅に示しておいただけで、1年生も、工五六七四上中尺合乙老を操りました。教室の都合で、前面に楽譜を示すしか方法がないのですが、正面のボードと自分の手元を行ったり来たりしながら(時には私のその場での注文「ここで四合老四と入れて！」等にもしっかり対応して)曲を楽しく演奏してくれました。



(グループで助け合って練習しています)



(ピアノの即興伴奏と歌声も入れて楽しく演奏)

島唄の「ていんさぐぬ花」は弾き歌いを目指しましたが両方同時に行う難しさを体感しました。さらにコマーシャルでおなじみの「海の声」は、多くの生徒が関心を持って練習しました。ボードに工工四が書ききれないので、A・B メロは歌うフレーズにし、合の手を三線で弾くようにし、雰囲気を出し、どのクラスもとても雰囲気のある「海の声」になりました。

今後の課題

奏法に時間をかけて鍛錬し、レパートリーを増やしたり、琉球音階を用いた自作のフレーズなどを曲中に挟むことなど、試みたいことは多くありましたが、1か月弱のレンタルの期間は短く、名残惜しいものでした。しかし『本物（皮の部分は合皮ではあるが）』を使用でき、他校より借りたニシキヘビの皮で貼られた楽器も見たり弾いたりでき、何より全員で楽しく演奏できたことで、三線の音色の魅力を味わうことができました。

また、沖縄の悲しい侵略の歴史や、戦争で焦土と化した中でも、沖縄の人々の三線への愛着は変わらず、捕虜収容所にて米軍から支給された缶詰の空き缶やパラシュートの紐、そしてベッドの木製部分などを利用し、三線の代用楽器として「カンカラ三線」を作ったというエピソードにも耳を傾けてくれました。



◇ 次年度への課題（音楽・美術・書道三科に共通すること）

手狭な教室と備品不足。しかし昨年度、今年度で少しずつ備品も購入していただき、改善しつつあります。日々の活動で、生徒にとって不利益が出ない状況を作っていく必要があると感じています。学ぶことや表現するための高い基礎力を持つ生徒たちが、さらにその力を磨き、十分に発揮できるようにしていきたい。芸術活動の思考の深まりや表現の工夫など、実際に構成する活動をよりアクティブにするためには表現活動そのものを鍛錬する必要はもちろん、表現されていると感じる視野を広げることが重要で、その環境を整えていくことはこれからも芸術科の重要課題であると感じています。